

動物飼育・人と動物の関わり

鈴木 知佳

はじめに

私はとくに住む祖父母のペットとの関わりの様子などから、動物がそばにすることが人に大きな影響を与えると強く感じている。研究のテーマとして「人と動物の関わり」を選んだのも、ペットが人の心を安らかにしていることを痛感した体験があったためである。

また、イルカセラピーという言葉を目にしたことがある。自閉症児が、イルカと触れ合うことによって、次第に心を開くようになるそうだ。動物と接することで人の心を癒すアニマルセラピーというのも注目されていて、不登校の子どもにも効果があったときいたこともある。

私は、この研究で動物とのかかわりが人にどういった影響があるのかを考察するとともに、学校と家庭での動物飼育の違いを考える。そして、子どもたちの心を豊かにする教育にふれてゆきたい。

第1章 アニマルセラピー

1 アニマルセラピーの分類

AAT（Animal Assisted Therapy：動物介在療法）と、AAA（Animal Assisted Activity：動物介在活動）がある。この二つの他に、動物にふれることによる癒し効果があり、家庭のペットに慰められるのは、これにあたる。

「セラピー」と名がつくことからAATは法的にも資格を持った医師、看護師、各種療法士などによる、動物とボランティアの参加を得た医療行為とみなされる。対象である患者の選択、治療目標と方針の設定、動物の役割、実施現場での責任の所在、効果の評価など、これら全てを人間の医療の専門家が明確に行うのがAATである。「イルカセラピー」、「乗馬療法」、さらに、「盲導犬」もこれに当たる。

一方AAAは動物と触れ合うことが目的であり、動物を連れたボランティアが各種の施設や病院へ訪問をする活動のことである。

2 イルカセラピー

3 ペットセラピー

厚生省が行った調査で、一人暮らしでペットを飼っている高齢者の方にアンケートをとったところ、動物を「家族」、「子ども」、「友達」と考えている方がほとんどである。また、「動物としゃべろう話す」というのが48%、「時々話す」は39.3%という結果が出た。つまり、動物

は孤独のさみしさをなくしているということなのである。

動物には人間の心を落ち着かせるという力もあり、穏やかな気持ちにさせてくれるのだ。人は温かくて、柔らかいものに触れると不安、ストレスがやわらぐといわれている。

ペットを飼うとどんな効果があるか

●心理的効果

不安をなくし、やる気を起こさせる、気力が高まる。生活に張り合いが出るペットを飼うことによって、責任感や自分は必要にされているんだという気持ちが芽生える。また、笑いや安らぎ、楽しさを与えてくれる。

●社会的効果

人との触れあいや会話が増える。散歩のつれていったときなどに、思わず他の犬に声をかけてしまったり、飼い主と話が弾んだりする。人とのコミュニケーションがうまく取れる。

●生理的効果

動物と触れ合うと血圧が下がる。寿命が延びる。6ヶ月以上一緒に暮らすすでに親しくなっている自分の犬をなでているときは、知らない犬をなでているときよりも血圧の下がり方が大きかった、などの報告もある。

第2章 動物の命の重さ

1 ペットの現状と動物保護管理の諸問題

ペットフード工業界の「平成11年度の犬猫飼育数調査」によると、日本全国で飼われている犬は約956万7000頭、猫は約754万頭である。犬は約5世帯に1世帯、猫は約7.5世帯に1世帯の割合で飼われている計算になる。これにウサギ、鳥類、エキゾチック・アニマルなど小動物を加えれば、日本人はかなり高い率で動物たちと暮らしていることになる。

こんなに動物が好きなのに、全国にある各動物保護センターではなんと年間65万頭もの犬と猫が殺処分されている。1日に換算すると、約1800頭という圧倒的な数字である。

捨てられるのはたいていが目が開いたばかりの小犬・小猫などである。ペットの飼い主が、平然と小犬・小猫を道端へ捨て、あるいは管理施設へと持ちこむのである。道端へ捨てられたものは飢えと迫害に苦しみ、ほとんどが死んでいく。また管理施設へ持ち込まれたものはほぼ全てが数日内に殺処分される。それは安楽死ではなく、炭酸ガスによる窒息死だ。

小犬・小猫を望まないなら、避妊・虚勢手術を受けさせる必要がある。「かわいそう」、「費用がかかる」の問題ではない。このままでは、いつまでたっても現状は改善されない。生まれたら責任を持って里親を探す。あるいはあらかじめ、産ませないための処置をする。これはペットを飼う上での最低条件だ。繁殖を管理するのは、保護することなのである。生殖機能を取り除く避妊・去勢手術を「自然ではない」「かわいそう」そして「動物の意思を無視しているような気がする」との理由で拒否する人も多いようだが、処分の意味をよく考えるべきである。「管

理」は「コントロール」だが「ケア」でもある。

また、家の増改築をしたところ、犬を飼うスペースがなくなった。新しく車を購入したのだが、今まで犬小屋をおいていたところを車庫にするため。そんな理由で、人間の自分勝手な都合で、長年連れ添った生き物が使い古したものの同然に捨てられている。

このようなとてもペットを家族の一員とっていないような行動は、日常茶飯事であるらしい。動物を飼育する能力にかけ人、飼う資格の無い人が、そのことに気がつかずに「動物が好き」だから飼っている。飼いたいとの欲望に任せて生き物を容易に手に入れ、自分の都合で捨てている。私はこの現状に驚きを隠せないと同時に、行き場のない憤りを感じている。

2 心と命の教育

第3章 動物飼育の現状

1 アンケートの趣旨

《目的》

私は今の子どもたちにとって心の教育が必要であると感じている。そして、それが必要とされている現状であるためなのか、もしくは、必要とされているにもかかわらず、ペットは人に大切にされていない。まるでもののように扱われている家庭も少なくないことがこれまでの調査で分かった。

しかし、私の周りには「ペットが死んでしまって、学校で泣いていた友達」や「ペットを家族同然に考え、大切にしている友達」が多い。そういった友達は、どのような体験をしてきたのか。また、家庭だけでなく、学校での動物飼育が関係していないか。といった疑問を解決したい。加えて、実体験の生の話の中から、動物が人に与える影響を知りたい。

《対象》

国土館大学初等教育専攻の4年生28名と、へき地教育研究会に所属する1・2年生28名で、計56名。このうち、男子20名、女子36名である。

なぜ、学生を対象にしたかという点、「ペットが死んでしまって、学校で泣いていた友達」や「ペットを家族同然に考え、大切にしている友達」が多いのは、私の周りにいる人であるためだ。そして、もし小学生であれば、今現在飼っている動物は思い浮かぶが、なかなかそれまで飼ってきた動物について思い起こせないであろうと考えるためだ。小学生は、過去よりは、今現在が頭の中を支配していると感じる。学生は今までの多くの経験を総合的に捕らえることができる。このアンケートに、解答者が印象に残った出来事を記入してもらおうつもりでいるが、大学生がその欄に記入することは、自分にとって今までで一番印象的だったことになるであろう。

《内容》

- 1、あなたは男性ですか？女性ですか？（男・女）
- 2、小学生の時、学級または学校で動物を飼っていましたか？飼っていた動物に丸をつけて下さい。……（金魚・うさぎをはじめとして34種の動物に丸をつける。また、その他・何も飼っていなかった・覚えていないという項目を作った。）
- 3、2で印象深い出来事がありましたか？……（a、とくにない・b、ある→具体的に出来事を書く欄を設けた。）また、飼育係や飼育委員をやっていましたか？（はい・いいえ）
- 4、家庭で動物を飼っていますか？また、飼っていましたか？飼ったことのある動物に丸をつけて下さい。……（犬・猫をはじめとして36種の動物に丸をつける。また、その他・飼ったことはないという項目を作った。）
- 5、4で印象深い出来事がありましたか？うれしかったこと、悲しかったこと、大変だったこと……なんでも結構です。……（a、とくにない・b、ある→具体的に出来事を書く欄を設けた。）

2 アンケート結果の推測とそこから読み取れる事柄

まず、このアンケートの協力体制は別として、内容の3、学校飼育動物の印象的な出来事、内容の5、家庭飼育動物（ペット）の印象的な出来事がないという回答は、動物への無関心を意味すると捉える。動物と深く関わっていれば、必ず何かしらの思い出があるはずである。

動物の世話をして、その健康や感情に気を使いながら動物と親しく付き合ううちに、子どもは自己の価値を見出すようになり、特に自己尊重の気持ちが乏しかった子が、自信を持ち他の子との関係も良くなるという研究も報告されている。

つまりは、動物とのかかわりが密接な人ほど、生き生きとした、動物との体験を語ることができる。

では、このアンケートから読み取れるであろう事柄を結果の推測とともに、いくつかあげる。

1、飼育係、飼育委員の経験がもたらす影響

飼育係や、飼育委員を務めたことがある人は、たくさん動物に関わり、世話をしていくうちに何らかのエピソードが残るのではないかな。その結果、務めたことがない人に比べて、動物への興味が増すのではないかな。

逆に、学校・学級で動物を飼っていたにもかかわらず、心に残るエピソードがない人は、飼育とは無縁で、関わり合いが充分になかったのではないかな。

2、学校、家庭双方に及ぼす影響

私は、小学3年の時に授業で飼った蚕を日曜日に当番で持ち帰ることにより、愛着をもち、親に「家でも飼わせて」と何度も頼み込んだ。学校で飼わなければ、絶対気持ち悪いといってさわれもしなかったであろう蚕を自分だけのペットとして飼いたいと思ったのも、学校の影響を

受けたためといえる。

物理的な面だけでなく、心理的な面でも両者は互いに影響していると考えられる。学校で動物に興味を示したのならば、家庭でもペットとの思い出があるであろうし、逆に、家庭でペットを大事に思っていたのならば、学校のペットに愛情を注がなかったとは思えない。

家庭と学校、どちらにもエピソードを持つ人と、どちらにもエピソードを持たない人、どちらかに分かれるのではないか。

3、死別体験の印象強さ

動物を飼っていて学ぶことは様々であろうが、忘れることのできない経験は、愛着をもった動物との別れであると思われる。出会ったものとは、いつかは別れる時がくる。それは悲しいことである。とりわけ「死」の別れは印象深いであろう。

かわいがっていたペットが死んでしまった悲しみ、「ペトロス」を乗り越えることによって子どもは、「死」という悲しい事実を理解する。ほとんど「人間の死」を経験することのない子どもたちにとって、ペットが自分より先に死んでしまう経験は、情操教育の助けにもなる。

学校での動物飼育のエピソードよりも、長年ある一つの命と生活をともにする家庭での動物飼育のエピソードにこの死別体験を記述する人が多いのではないか。

4、男女差

動物がかわいらしく描かれたキャラクターは、小学生に人気がある。ハローキティ（猫）、マイメロディ（うさぎ）、ケロケロけろっぴ（かえる）などは私たち大学生が、小学生だった時も大人気だった。実習で小学校を訪れた時は、とっとこハム太郎（ハムスター）、ポムポムぷりん（犬）、たればんだ（パンダ）、アフロ犬（犬）がもはやしていると小学生が生き生きと話してくれた。ディズニーのキャラクターは全て動物がもとになっているし、幼児向けの番組では、動物がやさしく、楽しく子どもたちに語りかける。

このように、子どもたちは、動物のキャラクターに目がないが、男子は一向にそういったキャラクターに興味を示さなくなる。上に挙げたキャラクターは、女子を対象に作られたといっても過言ではない。しかし、男子が動物に興味を示さなくなるのではなくて、釣りが大好きであったり、ぶっきらぼうに犬を抱いて、子分のように扱ったりすることもある。

しかし、私が小学生だった頃を思い起こすと、やはり、動物とうまく関わっているのは、女子の方だったように感じる。飼育係や飼育委員は、ほとんどが女子だったし、世話好きなのはまぎれもなく女子なのだ。

このアンケートの結果も、男子より、女子の方が動物飼育に興味があるという結果になるのではないか。そのため、アンケートの内容1、はじめに解答者が男か、女かを記入する欄を設けたのである。

3 アンケートの集計結果

表-1、アンケート集計結果《男子》(20名) 表-2、アンケート集計結果《女子》(36名)

| 学校 | エピソード | 飼育委員 | 家庭 | エピソード |
|----|-------|------|----|-------|
| 13 | ○ | × | 0 | × |
| 8 | × | × | 0 | × |
| 7 | ○ | × | 4 | ○ |
| 7 | × | × | 5 | ○ |
| 7 | ○ | × | 15 | ○ |
| 7 | ○ | × | 9 | ○ |
| 6 | × | × | 4 | × |
| 5 | ○ | ○ | 15 | ○ |
| 4 | × | ○ | 0 | × |
| 4 | × | × | 1 | × |
| 4 | ○ | × | 1 | ○ |
| 4 | × | × | 2 | × |
| 4 | ○ | × | 11 | ○ |
| 4 | ○ | × | 6 | ○ |
| 3 | ○ | × | 1 | × |
| 3 | ○ | × | 0 | × |
| 2 | ○ | × | 8 | ○ |
| 2 | ○ | × | 11 | ○ |
| 2 | × | × | 2 | × |
| 1 | × | × | 1 | ○ |
| 97 | | | 96 | |

※ 学校、家庭欄の数字は、飼育していた動物の種類
の数を示す。

※ エピソード欄の○・×は、学校、家庭それぞれの
動物飼育の際の印象深い出来事(エピソード)の
回答有無を表す。

※ 飼育委員欄の○・×は、学校での飼育係、飼育委
員の経験の有無を表す。

| 学校 | エピソード | 飼育委員 | 家庭 | エピソード |
|-----|-------|------|-----|-------|
| 19 | ○ | ○ | 10 | × |
| 18 | × | × | 18 | ○ |
| 16 | ○ | × | 13 | ○ |
| 16 | ○ | ○ | 14 | ○ |
| 15 | × | × | 2 | ○ |
| 13 | ○ | ○ | 4 | ○ |
| 13 | ○ | ○ | 4 | ○ |
| 11 | ○ | ○ | 16 | ○ |
| 11 | ○ | ○ | 12 | ○ |
| 10 | ○ | × | 12 | ○ |
| 10 | ○ | ○ | 4 | ○ |
| 9 | ○ | × | 3 | ○ |
| 9 | ○ | ○ | 3 | ○ |
| 8 | ○ | × | 5 | × |
| 8 | × | × | 2 | ○ |
| 7 | × | × | 6 | ○ |
| 7 | × | × | 11 | ○ |
| 7 | ○ | ○ | 3 | ○ |
| 7 | ○ | ○ | 13 | ○ |
| 6 | ○ | ○ | 3 | ○ |
| 6 | ○ | ○ | 2 | ○ |
| 5 | × | × | 4 | × |
| 5 | ○ | × | 13 | ○ |
| 5 | ○ | × | 5 | ○ |
| 5 | ○ | × | 4 | ○ |
| 5 | × | × | 7 | ○ |
| 5 | ○ | × | 3 | × |
| 5 | ○ | ○ | 1 | × |
| 4 | × | × | 0 | × |
| 4 | × | × | 4 | × |
| 4 | ○ | ○ | 6 | ○ |
| 4 | ○ | × | 7 | ○ |
| 3 | ○ | ○ | 1 | ○ |
| 2 | × | ○ | 17 | ○ |
| 0 | × | × | 8 | ○ |
| 289 | | | 243 | |

《学級または学校での動物飼育で印象的な出来事》(略)

《家庭での動物飼育で印象深い出来事》(略)

各々、良い経験・悪い経験・死別体験・管理の仕方の問題等の項目別にまとめた。

4 アンケート集計結果の考察

1、飼育係、飼育委員の経験がもたらす影響

全体56人の中で、飼育係や飼育委員を務めたことがある人は、19人である。このうち、学校・学級でのエピソードを持っている人は、17人。その逆で、学校・学級で動物を飼っていたにもかかわらず、何も心に残るエピソードのない人は男女合わせて、19人。そのうち、17人が飼育係や飼育委員を務めていない。(表-1、表-2)

この結果は、まさに飼育係・飼育委員という動物との関わり合いの多い仕事に関わっていない子どもたちの動物に対する関心のなさを決定付ける。

エピソードの一つにこういったものがある。

- ・4年の時、理科の授業でモンシロチョウをあおむしから育てた。観察日記をつけ、本当に可愛かった。さなぎからかえるところを生で見てベランダから放したら、そのチョウが何度も戻ってきた。とても感動した。

これは、私の親しい友人のエピソードで、実は、このアンケートを取る前にも日常の会話の中で聞いたことがあった。「私は、イモムシとかゲジゲジとかは嫌いだけど、モンシロチョウの幼虫だけは、大好きなの。」と彼女は言う。

理科の授業の中で、自分の、または小人数の班での小動物が、自分たちがあげたえさを食べて大きくなっていく様子を観察することで、子どもはその小動物に愛着をもつと考えられる。一度愛着をもった小動物は、ずっと大きくなってからも興味を示す。彼女は、今でもあおむしが大好きだし、私は、小学生の時に育てていたかわいいかわいい蚕の幼虫を見ても気持ち悪いとは思わない。

学校での動物飼育は、家庭での動物飼育と違い、自分が育てるんだ、との責任がないし、ずっと一緒に過ごすこともない。小学校を卒業してしまっても例えばニワトリだったら、ずっと生きているし、死んでしまったとの連絡が中学生になってから届くこともないだろう。届いたとしてもほとんどの子どもにとってそれは、無関心である。

家庭での死別体験のエピソードは、16もある。それに対し、学校での死別体験のエピソードは、2つしかない。死に触れたものはあるが、そのほとんどが学校・学級での管理の仕方の問題を語っているに過ぎない。(この問題は、第4章で扱う。)

つまり、学校においては、飼育係や飼育委員の経験がそのまま学校飼育動物への興味につながるのである。動物に触れ、観察し、動物が快適に過ごすためにどうしたらよいか考え、実行する。そして愛着をもつことが大切なのである。

2、学校、家庭双方に及ぼす影響

1で飼育係・飼育委員の経験がある人と、学校での飼育動物に興味を示さなかった人を取り上げたが、飼育係・飼育委員の経験はないが、学校の飼育動物とのエピソードがある人も多い(男子11人、女子9人)。ここに挙げられる人たちは、どうであろうか。このうち、男子8人、女子7人は、家庭での動物飼育に何らかのエピソードをつづっている(表-1、表-2)。つまり、家庭で飼うペットとの交流もあると考えられる。飼育係・飼育委員の経験がなくとも、家庭でペットを大事にしている人は、学校でも動物たちに興味を示し、愛情を注いだのであろう。

逆に、家庭での動物飼育にエピソードがある人男子11名、女子29名のうち、学校での動物飼育にもエピソードがある人は、男子9名、女子21名と大部分を占めている。(表-1、表-2)

したがって、学校と家庭双方は、互いに影響しあっているといえる。これは、小学生の子どもたちの活動は、ほとんどが学校と家庭であり、人間関係も、学校の先生、友達や家族との間に生まれるということからも想像できる。

しかし、家庭と学校、どちらにもエピソードを持つ人と、どちらにもエピソードを持たない人、どちらかに分かれるのではないか。という推測は、数字の上では、まとまりをつけられない。(表-3)

表-3、学校及び家庭での動物飼育に関するエピソードの有無

| | 家庭○ | 家庭× | 計 |
|-----|-----|-----|----|
| 学校○ | 30 | 6 | 36 |
| 学校× | 11 | 9 | 20 |
| 計 | 41 | 15 | 56 |

※ 表-1、表-2をまとめたもの。

※ エピソード有りは○、なしは×とする。

さらに、家庭と学校、どちらかでたくさんの種類の動物を飼っていれば、もう一方でもたくさんの種類の動物を飼っているという結果が出るのではないか。という推測も、全くバラバラであり、共通性が見られない。(表-1、表-2)

これは、人も動物もそれぞれ一つの命であり、みんな違っていることからくる結果であると考えられる。家庭での環境、学校での環境、その人一人を取り巻く環境は、数知れない。どの人にとっても動物飼育の経験は、他の人には代えられない。そして、一つの命である人と、一つの命である動物とのエピソードは、まとめられるわけでもないのである。

3、死別体験の印象強さ

1で述べたように、家庭での死別体験のエピソードは、16もある。それに対し、学校での死別体験のエピソードは、2つしかない。やはり、動物と一緒にいる時間の長い家庭での飼育動物の方が、責任があり、愛着がわくためであろう。

注目したいのは、家庭での飼育動物のエピソード45のうちの16が、死別体験に関するエピソードであることだ。管理の仕方の問題の欄に記入したエピソードも、「死」に関するものが多い。全部合わせると、家庭での飼育動物に関するエピソードを書いた人41人のうち、「死」に関するものを書いた人は、27人もいるのだ。これは、半数以上…57%に値する。

4、男女差

根本的に、飼育係・飼育委員を経験しているか、いないかという項目で数値が違う。女子で、飼育係・飼育委員を経験しているのは、全体の36人のうちの17人もいるのに対して、男子では、全体の20人のうち、2人しかいない。(表-1、表-2) また、百分率で表すと、女子が47%なのに対し、男子はたった10%しかいないということになる。

男子より、女子の方が動物飼育に興味があるという結果になるのではないか。という推測も、まさにそのとおりであった。男子の学校飼育動物の平均種類数は、4.85。家庭では、4.8である。そして、女子の学校飼育動物の平均種類数は8で、家庭では、6.75である。

家庭で動物を飼うことは、簡単なことではない。だから、このような数値が出るのはありえることだが、小学校は、だれしもが通い同じだけ動物に関わるチャンスがある。それにもかかわらず、女子の数値が、男子の数値の1.7倍にもなってしまうのはなぜか。このアンケートに協力してくれた男子が通う小学校では、たまたま動物飼育が盛んでなかったとは考えられないので、やはり、女子の方が動物に興味を示し、大学生になった今でも印象深く覚えていたと考えざるを得ないのである。

5、アンケートを通じて感じたこと

前章で、暗くて未来のないペットたちの現状を述べた。しかし、このアンケートに書かれたそれぞれのエピソードは、「かわいいペットのために一生懸命世話をしたこと」や、「大好きなペットが死んでしまって、とても悲しい思いをしたこと」、「自分の管理の仕方が悪くペットにかわいそうなことをしてしまったため、反省していること」などであった。子どもの心は、本当に素直で、「動物を大事にしなくてはいけない」という気持ちが存在することに、少し安心した。

- ・3年の時飼っていたハムスターの具合が悪くなり、お医者さんを探したり、治るように看病した。結局死んでしまったが、クラス一体となって頑張ったのは初めてだったと思う。
- ・3年の時、教室にインコが飛んできて、クラスで飼うことになった。名前もみんなで決めた。クラスが終わる時、家で飼える子が引き取った。「クラスのペット」としてみんなで可愛がったのは良い思い出。
- ・彼がいてくれたおかげで家族が一つになった。天国に行ってからでも家族に愛されている。今でも思い出すと泣いてしまう。

といったエピソードからは、動物飼育によって、クラスや家族が一つになったとの声を聞くことができ、動物が人に与える影響を実体験から知ることができた。

また、アンケート回収の際に、友達が「このその他の欄のスペースじゃ私が飼ってた動物の全部を書ききれないよ。私の家では、キツツキとか、ふくろうとか、ムササビとか、いもりとか変な動物ばっか飼ってたから、犬や猫…普通の動物が飼いたかったよ…」、「私にとって、愛猫くーちゃんは特別な存在だったよ。これを語ったら、1時間じゃ終わらないよ。」、「実家に帰ると大好きな犬に会えるんだ!」などと、話を膨らませてくれた。

さらに、「この間、小田急相模原の駅で、里親探している団体があったんだけど、この研究内容とつながることがあるんじゃない?」、「私もペットセラピーについてのレポートを書いた

ことがあるよ！」などと、アドバイスしてくれる友達も多いのだ。

そうされることで、私は自分の研究に積極的に協力してくれるその友達に対して感謝するし、次に会ったときにまた、話が膨らんでいく。

道端でペットを連れていて人を見掛けるが、知り合いであれば、そのペットの話聞いてしまう。小さな子が、そのペットを見て、近寄ってくることもある。すると、ペットを連れて人と、近所に住む子どもたちは、顔見知りの存在になる。

このように、ペットというのは、人と人をつなぎ付けてくれる存在であると強く感じた。

第4章 児童期の動物飼育

1 児童期の子どもたち

2 新学習指導要領（道徳・生活科）

3 可愛がってこそ子どもの心を育てる動物たち

（動物の子どもへの影響）

動物が人の血圧を下げたり、老人を元気付けたりすると第1章でも述べたが、これは欧米で1984年以來開かれている人と動物の関係、影響を調べる学会、「人と動物の絆・国際会議」で発表された研究発表である。

- ・アメリカの特別学級では子どもたちに自分の好きな動物を選ばせ一緒に過ごさせるが、心の傷で言葉を失った少女が、自分の選んだ亀に言葉をかけるようになり、やがてその亀を抱いているときには人と話せるようになった。
- ・アメリカの小児病棟には、訓練された犬が子どもに寄り添い、親から離されて不安定な子どもの気持ちを明るくし、病気に立ち向かう勇気を引き出している。

などと、精神科医、医師、心理学者、生理学者、教育者、看護婦、保育士、獣医師、動物学者、犬の訓練士などが報告している。

また動物の世話をし、その健康や感情に気を使いながら動物と親しく付き合ううちに、子どもは自己の価値を見出すようになり、特に自己尊重の気持ちが乏しかった子が、自信を持ち他の子との関係も良くなるという研究も報告されている。

「ペットを長く飼っている児童は、表情や態度で相手の気持ちを理解できるので、友達から信頼されている」、「友達と取っ組み合いの喧嘩になったとき、ペットのいる子は相手の表情から『止めて!』という信号を受け取りことができるので、酷いいじめには発展しない」、「ペットと暮らしている子どもたちは、心に残す思い出をたくさんかき出すことができる（感受性が豊かに育っている）」、「可愛がっていたペットとの死別体験を持つ中学生は、自殺を否定的に捉えている」との調査報告もされている。一方日本の学校では、「動物に会いたくて登校する」、「辛いことがあるとクラスのうさぎを抱いて元気になる」、「動物の世話を通じて仲良くなる」などの

子どもたちの声が聞かれ、「教室にハムスターが一匹いるだけで雰囲気は柔らかくなり、子どもの気持ちさがまとなりやすくなる」との先生方の話もある。

なお、最近アメリカのFBI（連邦犯罪調査局）は、残酷な犯罪を繰り返す犯罪者の75%は、少年期から青年期に「小さな無抵抗の動物に残酷な行為を行っていた経歴がある」と報告している。身近な動物の存在が子どもの心の安定に役立っただけでなく、その心の傷を示す指標にもなっているのである。その子が動物をどう扱うかで、その心のストレスを早期に発見できるほど、動物は子どもの心に深く働きかけているのだ。

（学校での飼育の必要性）

動物の子どもへの効果は上記の通りである。子どもにとって知育、体育の向上はもちろん大事だが、何よりそれをつかさどる心が健全に育つことが重要だ。

子どもには様々な体験の中に、必ず動物体験を与える必要がある。動物先進国の欧米では、ペットは子どもたちの相談相手であり、子どもに社会を教えるのに役立つと捉えられている。そして、子どもも動物も親である大人がしつけ、社会化するものと考えられている。

しかし、現在の日本では住宅事情や、家庭の力が弱まったこともあり、子どものために動物を飼う家庭が少なくなった。そのために文部省も生活科の体験授業の中に動物飼育を組み込んだ。現在では全国のほとんどの学校で動物が飼育されている。新学習指導要領では、心の教育が重要視されており、ますます学校飼育動物の必要性が増しているといえる。

（学校飼育動物の問題）

学校では、あまりに動物を知らない先生が飼育に関わらざるをえず、先生方の努力にもかかわらず様々な問題が生じている。中には残酷とも言える飼育が子どもたちの心を損なう現状が見られる。「うさぎを可愛がろうね」と子どもに話している先生が、実はうさぎに触れない、都下、飼育動物が餓死しても、反省も悼みも子どもに伝えずすぐに新しいのを補充するなど、信じられない飼育が行われていることがあるそうだ。これは、学校は今まで飼育を単なる教材として扱ってきており、駄目になれば新しく補充する、との考えから起こったことである。

このような状態に、動物好きの子どもたちは、動物を大事に扱わない先生方を深く恨んでしまうか、または動物を知らない子どもたちは、動物とはこの程度に扱えば良いのだと思いこみ、物言えぬものへの思いやりの気持ちを育てられないまま大人になってしまふことが心配されている。

子どもには100万回「可愛がってね」と言い聞かせても分からない。まず先生が動物を知り、可愛がって、子どもたちに様々な良い影響を与える必要がある。

5 学校飼育動物から子どもたちが学ぶこと 一様々な学校での動物飼育の例一（略）

おわりに

昔、子どもたちは、動物と一緒に遊び、育った。しかし、家庭で動物を飼えなくなった現在、

子どもたちに、人間以外の存在を教え、物言えぬ小さな弱いものへの思いやりの気持ちを培うために学校で動物を飼育している。のにもかかわらず、多くの小学校では、学校飼育動物の面倒を見る人が限られている。飼育委員になった子どもたちは、たいいもともと動物が好きであろうし、動物に興味のない子どもたちは、そのまま子供時代を過ぎてしまう。そういう子どもたちにこそ動物飼育を経験してほしいのに…。

先日、へき地教育研究会に所属していた時、何度も訪問した小学校へもう一度訪問する機会があった。神奈川県津久井郡の山中にあるその小学校は、来年度から地域にある他校との合併が決まりつつあるほどの小規模校である。現在児童数は、6名。大自然の中で、子どもたちはのびのびと育っている。その小学校では、朝の活動として花壇に水をやり、飼育している動物の世話をする。花壇・プランターの花の手入れと水やり、鳥小屋のえさやりと掃除、カモの散歩と池の掃除を毎日ローテーションで分担しているのだ。

その小学校に遊びにいくと、どの子どもたちも「私を見て！」とばかりに、話しかけてくる。私の手を引っ張って、一輪車にまたがる。一見皆バラバラのようであるが…カモの池の前まで行くと、子どもたちは、自分の主張をするのをやめて、一斉にカモの話をし出すのである。「カモクイズ第1問目は…」と皆が一つになる。続いて鳥小屋の前まで行くと今度は、「鳥クイズ」が始まる。小規模校だからこそできる学校飼育動物とのかかわり方だと思う。この小学校の子どもたちは、人間の子どもの友達には確かに少ないけれど、動物の友達がたくさんいる。

私は、人と動物の共存の必要性を再認識した。動物たちに癒されるという経験は、動物たちを癒した者でなければできないのである。動物たちを可愛がらなければ、動物たちは、人間に何も与えない。しかし、動物たちを可愛いと思っている時、人間は、動物たちからたくさんの影響を受けているのだ。

この研究を進める中で、私はペットブームに隠された年間65万頭の殺処分という現状と、処分される命の重さ…人間のエゴに、何度も怒りを覚えた。

- ・児童に命を教えるとしてニワトリにどんどん卵を産ませてひよこにしているが、飼育する場が半畳の小屋でそこに20羽の親と20羽のひよこ、そして数の知れない卵がひしめいていた。
- ・子どもに命を教えるためうさぎに無制限で出産させるため、育児をする場所がなく、子うさぎの死体が散乱したり、動物が過密となり正常な生活を営めない。
- ・うさぎの争いで傷ついたうさぎが、治療費の手当てがないため獣医師にかけてもらえない。傷はすぐに化膿し、やがて菌が全身に回り、ボロボロになって死んでしまう。

といった情報を得るたび、学校では動物を飼う意味がないのではないかと感じた。むしろ子どもたちに悪影響であるし、そこで飼われる動物がかわいそうである。そんな動物たちを1匹でも多く救いたい。そんな環境に置いてはいけない！しかし、県の保健衛生部の獣医師で、公衆衛生・食品衛生、また、動物愛護思想普及活動にも携わっているこの方は、私のように学校で

の動物飼育をやめた方がいいと、学校飼育動物を考えるとというHPの掲示板に書き込んだ方に返事を書いている。

『動物を隔離しておくことは簡単です。動物を熟知した人だけが動物の世話をして、ろくに知らない子どもを遠ざけておけば、動物は平和に生涯を送り、平和に死んでゆき、世話をした人たちが涙と満足感に浸り、後悔するようなことは何もない。でも、それは何も生まないのです。

そのことを私は触れ合い事業を繰り返すことで知りました。はじめは他人事のように、遠巻きに動物を眺めているだった子どもが、恐る恐る手を出して、動物を抱き上げ、緊張でカチコチになりながら、やがてにっこり笑う。動物がその存在だけで、子どもの心を揺すぶって、眠っていた感情を揺り起こす場面に立ち会っていると、奇跡のような気さえしてきます。

抱かれているうさぎは迷惑かもしれない。でも、そのうさぎが小さな犠牲を払いながら、子どもの心を起こしてくれることによって、初めて子どもの心に「可愛い・愛しい」という感情が生まれてくるんですね。そう感じる心をもった時にこそ、「かわいそう・大切」という心も生まれ、子どもは可愛がることの大切さや、世話をすることの責任にも目覚めはじめるのだと思います。隔離され、かわいそうだから触ってはいけない、と言われて、ただ眺めるだけの動物に、子どもの心が動くことはないでしょう。…（中略）…

その「かわいそう」と言えるようになった人たちも、子どもの頃、何も知らずに動物に手を出して、知らないうちに動物を苦しめながら、動物に対する愛しさを覚えたはずなんです。』

小学生、児童期にある子どもたちには、「なにかに思いをかける、何かを大事にする」という体験が必要なのである。そして、人は動物と共存してゆくことが大切だという結論になる。もう一つ忘れてはならないのが、たった一人の力は大きな力の源にはなるが、人は一人では何もできないということだ。背負ってしまうことは、何も生まない。

新学習指導要領の解説の生活科編に「学校での小動物の飼育に当たっては、管理や繁殖、施設や環境などについて配慮する必要がある。その際、地域の獣医師と連携して、動物の適切な飼い方についての指導を受けたり、常に健康な動物とかわかることができるようにする必要がある。」と明記されている。学校では、獣医師や自治体行政との結びつき、協力、支援体制が求められる。教師一人で子どもを育てるのではなく、学校で育てる。学校だけではなく、地域全体で育てる。それが今、日本で求められている教育像なのである。

私には、二人の妹がいる。私が高校2年生の時、まだ下の妹は小学4年生だった。家ではハムスターを飼っていて、その妹が毎日面倒を見ていた。冬休みのある寒い朝、ハムスターの1匹が死んでしまっていた。妹は、「かわいそうなことをしてしまった」とずっと泣いていた。夕方、部活を終えて帰ってくると、妹は、死んでしまったハムスターを手抱いたまま眠っていた。今

でもそれを忘れることはできない。一日中泣いた挙げ句、そのまま眠ってしまったのだそうだ。

高校生であった私にとってそのハムスターは、ただの家庭のペットだったのだが、妹にとっては、大切な大切な仲間だったのである。その時の私には妹がペットの死骸を一日中抱いていることが信じられなかった。

この研究を進めてきて、私はこの時の妹の気持ちが初めて分かったように感じている。そして、妹には、この時の気持ちをずっと忘れてほしくないし、これからも小さな命を大切にしてほしい。私自身もこの経験や知識を教師になり、保育者になった時に役立ててゆきたい。

参考文献・参考資料（略）